

青春スクロール

母校群像記

http://t.asahi.com/dnnn

自由満喫 楽しさも悔しさも学んだ

スポーツ界で活躍する慶応関係者のうち慶応高校（塾高）OBは、大学から入学した人に比べて意外と少ない。

慶大を経てプロ野球・南海ホークス（当時）に入り、8年間で54勝を挙げた投手の渡辺泰輔（73、1961年卒）は、福岡



塾高の記念ボールを持つ渡辺。後ろには南海のユニホーム

慶応高校 5

県の公立中から進学した。速球を武器に、高3の春の甲子園で8強。高3の夏は神奈川大会決勝で法政二高の柴田勲（元巨人）と投げ合い、延長で敗れた。「悔しかった」が、その後の2人は食事を共にする仲に。日本シリーズでも対戦した。

「駅から校舎まで続くイチウ並木が大好きだった。ルンルンした気分で歩いたのを思い出します」。イチヨウの葉が色づき、やがて散る……。その変化に人生を重ねてきたという。北海道日本ハムファイターズ

の入団2年目、中継ぎ投手として活躍する白村明弘（23、2010年卒）も慶大を経てプロ入りした。岐阜県出身で、塾高入学後しばらくは「ホームシックだった」という。勉強との両立に悩み、行きつけのラーメン店主に話を聞いてもらったこともある。印象に残るのは、高2の明治神宮大会決勝。最後の打者を前に「これで日本一になれると思うとゾクゾクした」。

サッカーJ2のコンサドーレ札幌のFW都倉賢（29、05年卒）は塾高時代、川崎フロンタ

「男ばかり18クラスで『圧がすごかった』と笑う都倉



ーレギュースに所属した。小中学校時代は「一匹おおかみの存在だった」が、1学年に18クラスある大所帯の男子校に進み、自由な雰囲気の中で精神的にも成長できたという。「塾高時代の親友とは、今も芯の部分でつながってます」と話す。

3年前のロンドン五輪フェンシング団体の銀メダリスト、三宅諒（24、09年卒）は高校進学の際、あえてフェンシングの強

「宅配ピザを学校に頼んだ生徒がいて驚いた」と笑う三宅



豪校を選ばなかった。「物事をより広く見られるようになりた」と思ったから」と言う。塾高時代から日本代表チーム入りしたが、学校のフェンシング部に入学して仲間と高校総体を目標にした。「主将としてチームの先頭に立つ、という経験ができた」と振り返る。

5年後の東京五輪の追加競技に空手を入れるべく奔走してきた世界空手連盟事務総長の奈蔵

稔久（69、1965年卒）は、空手部主将だった。3年の時の担任だった「クロチン先生」のことが忘れられないという。同級生が退学処分になる時、先生は職員会議で「何とか退学だけは」と懇願。ホームルームで「守ってやれなかった」と泣いた。「そんな大人になりたかった。社会に出て、そういう生き方がいかに難しいかも痛感したが、思いは今も変わらない」



商社マンとしての国際経験を買われて今の職についた奈蔵